別添３－１

校内研究の概要

研究推進 WG

教育委員会　指導参事（素案）

Ⅰ　研究推進の方向性

１　小中一貫教育の視点

砂川市では、子どもたちにより良い環境において、より質の高い学校教育を提供し、特色ある学校教育を進めることを通して、将来のまちを支える人づくりにつながる教育を目指している。

そのため市は、子どもたちの現状と課題を踏まえ、「小中一貫教育」を推進することとしており、本校においては義務教育学校であることの強みを生かし、９年間を見据え、子どもの発達の段階に応じたきめ細かい指導と、前期課程と後期課程が一体となって学習面や生活面での切れ目のない支援を行うという視点に立った研究を推進することが求められる。

なお、「砂川市義務教育学校基本構想」においては、小中一貫教育の具体的な取組として、「確かな学力」に関わり、次のことに取り組むこととされている。

- ■　各教科等における９年間を見通した一貫性のある指導方針と「４－３－２制」の各ステージにおける学習に関する児童生徒の姿をもとに、計画的・継続的な指導を通して、確かな学力を身に付けさせます。
- ■　教科等横断的な視点から９年間を見通した一貫した教育課程を編成し、学習指導要領で示された資質・能力の３つの柱をバランスよく育成します。
- ■　教科等の特質や児童生徒の実状を踏まえ、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実し、「主体的・対話的で深い学び」に向けた授業改善を行います。
- ■　児童生徒一人一人が「何を学ぶのか」「どのように学ぶのか」等を授業の中で意識できるよう、課題の提示と振り返りを行う一貫した授業を行います。
- ■　前期課程の後半から段階的に一部の教科で担任以外の教員が指導する教科担任制を取り入れ、教科の専門性を生かした学習指導を行います。

「砂川市義務教育学校基本構想」より

２　これからの時代を見通す視点

人口減少や少子高齢化、高度情報化などの急激な進展とともに、シンギュラリティの到来など、私たちは今まさに予測困難な時代を生きている。こうした中、義務教育期にある子どもたちが社会に出て、自立した一人の人間として、自らのウェルビーイング（Well-being）を実現しながら豊かな人生を送るためには、指導者である教師が、子どもたちが生きる「これからの時代」を意識し、その時必要とされる力を見定め、９年間の指導や支援を通してその力を育むことが学校の責務といえる。

校内研究は、教育活動の質を高めるための核であり、研究を通じて育まれる力が、子どもの未来につながる内容とすることが重要である。

３　児童生徒の実態に立脚した視点

校内研究を実効性のあるものとするためには、現在の子どもの実態を見極め、そこに立脚した内容とすることが重要である。子どもの姿と乖離し、理論や理想が先に立った研究は、推進の結果もたらされる子どもの変容に直結することがないためである。

４　論拠をもとに研究の成果と課題を検証する視点

研究の成果と課題の検証にあたっては、教職員の意見や感想、感覚によらず、確かな論拠をもとに行い、研究の方向性や手法、理論、実践等が、具体的に子どものどのような面に変容として表れてきたかを明らかにする。

Ⅱ　研究主題

自ら問いを見いだし、解決策を模索して遂行する学習者の育成

Ⅲ　主題設定の理由

１　子どもたちを取り巻く社会情勢

我が国を取り巻く社会環境は、少子高齢化の進行、情報技術やグローバル化の進展、不透明な国際情勢などを背景として、将来の予測が困難な状況になっている。

また、世界の共通目標として掲げられたＳＤＧｓに係る取組を一層推進し、将来の世代にわたり恵み豊かな生活の確保を図るとともに、未来を切り拓く子どもたちを誰一人取り残すことなく健やかに育成し、一人ひとりがウェルビーイング（Well-being）を実感できる社会づくりが注目されている。

学習指導要領では、改定の基本方針として「社会に開かれた教育課程の実現」、「育成を目指す資質・能力の明確化」、「『主体的、対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善」、「カリキュラム・マネジメントによる教育活動の質的向上」が示されている。このように、社会の在り方そのものが劇変期を迎えている今、学校教育には、全ての子どもたちに現代社会における課題を主体的に捉え、解決に向けていくために、自ら考え、行動する力を身に付けることが使命として託されている。

そのため、９年間の義務教育期間を通して、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を両輪とした「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った教育や、これまでの教育実践と最先端のＩＣＴのベストミックスにより、児童生徒一人ひとりが持つ力や可能性の最大限の発揮につながる学習活動を推進するとともに、地域・家庭と連携・協働した「社会に開かれた教育課程」の実現と、カリキュラム・マネジメントを通じた次世代に求められる資質・能力の育成により、持続可能な社会の担い手を育てることが求められている。

２　児童生徒の実態

明るく元気なあいさつや返事ができるなど、全体的にはほがらかで素直な生徒が多い。また、与えられた役割や自らの責任を最後まで果たそうとする姿勢や、指導されたことについて意識して行動することができるなど、おおむね落ち着いた態度で生活しているといえる。

また、「全国学力・学習状況調査　児童生徒質問紙調査」の結果からは、相手を思いやる意識数値は年々上昇しており、他者を大切にする心が本市の子どもたちの大きな魅力といえる。

一方で、相手の気持ちを考えない軽率で粗雑な言動により他者を傷つけることや、通信機器を介したトラブル、自制心をもって自律的に行動することなど、課題を抱えた子どもも見受けられ、同時に自尊感情の低さも課題となっている。さらに近年は、発達上の特性を強くもった子どもも増えており、個に応じた指導や支援が求められるケースも多い。

こうした子どもの生活状況は、学習面にも影響を与えており、教科によっては意欲をもって前向きに授業に臨む様子が見受けられるが、受け身な姿勢が見受けられるとともに、課題によっては思考することをあきらめてしまったりする側面も見られる。

「全国学力・学習状況調査」や「標準学力検査」の数値結果は前期課程、後期課程ともに令和元年度以降下降傾向が見られ、特に令和５年度は全教科・全学年で全国平均を下回るなど、基本的な知識・技能の習得やそれらを活用する力が十分に定着していない実態にある。

特に、複数の資料を比較したり、関連付けたりしながら思考する問題や、指定された字数や使用する用語に基づいて記述する問題などの正答率が低い傾向が見られる。

また、「全国学力・学習状況調査　児童生徒質問紙調査」の結果からは、経年的に家庭学習時間が全

国平均と比較して、大きく不足しているなど、確かな学力の育成にあたっては、子どもの学びへ向かう意欲を高め、最後まで粘り強く考え、やり抜く力を身に付けさせることが必要である。

このように、個々の学力差や基礎的・基本的な学習内容の定着、応用問題への対応力などに課題が見られることから、授業改善と家庭と連携した学習習慣の確立を両輪とした学力向上の取組を推進する必要がある。そのためには、目の前の事象に対して「問い」をもち、自ら試行錯誤を繰り返したり、周りの人々と力を合わせてその解決に向けて主体的に取り組む力、さらには、解決に向かう過程や解決後に、新たな「問い」を発見する力を育成することが肝要である。

３　学校教育目標の具現化

本校の学校教育目標及び目指す児童生徒像、育成を目指す資質・能力は以下のとおりである。

■学校教育目標

自分を磨き、よりよい未来を創造する子どもの育成

■目指す児童生徒像

【知】	【徳】	【体】	【郷土】
よりよく考え、主体性と協働性を高めながら学び続ける子	思いやりにあふれ、豊かな人間性をもって人とともに生きる子	進んで運動に親しみ、安全で健康的な生活をつくる子	ふるさと砂川に誇りをもち、地域を支え未来を切り拓く子

■育成を目指す資質・能力

【知】	【徳】	【体】	【郷土】
①粘り強さ **②協働力** **③主体性**	あいさつ コミュニケーション能力 親切さ（思いやり）	運動の楽しさの実感 危機回避力 基本的生活習慣	情報処理力 国際理解力 キャリア形成力

本校では、校内研究を通して「知」の側面にフォーカスした取組を推進し、学校教育目標の具現化を図ることとする。なお、上記「育成を目指す資質・能力」については、それぞれ３つの柱について次のとおり学校経営方針に示されている。

①生きて働く基礎的・基本的な知識及び技能の習得
　⇒粘り強く取り組むことを通して獲得される、他の学習や生活の中で使うことができる基礎的な力
②未知の状況にも対応できる思考力、判断力、表現力等の育成
　⇒他者との協働によって獲得される、身に付けた知識や技能を用いて思考したり、他者に伝える力
③学びや人生や社会に活かそうとする学びに向かう力・人間力の涵養
　⇒事象に対して自ら問いを持ち続け、主体的に新たな課題の解決に取り組む意欲や態度

「目指す児童生徒像」の実現に向けては、試行錯誤の繰り返しに粘り強く向き合うことにより、知識・技能を確実に習得させながら、それを活用して個別・協働で考え、表現する授業の実践が必要であり、学びを通して新たな問いを発し続け、主体的に解決に向かう学習者を育成することこそ、予測困難な時代を生き抜き、持続可能な社会の担い手を育てることにつながるものと考える。

Ⅳ　研究仮説

1　研究主題に迫る学習指導場面

自ら問いを見いだし、解決策を模索して遂行する学習者の育成

○解決すべき「課題」の把握
○課題解決のために「どのようなこと（もの・方法）が必要か考える
○解決後に新たな「問い」を発見する
○学びの跡を「振り返る」

○個人で思考する
　※思考ツールを使って
　※タブレット端末の活用
　※他者の考えを参考
○教師と対話する
○ペアで話し合う
○グループで協議する

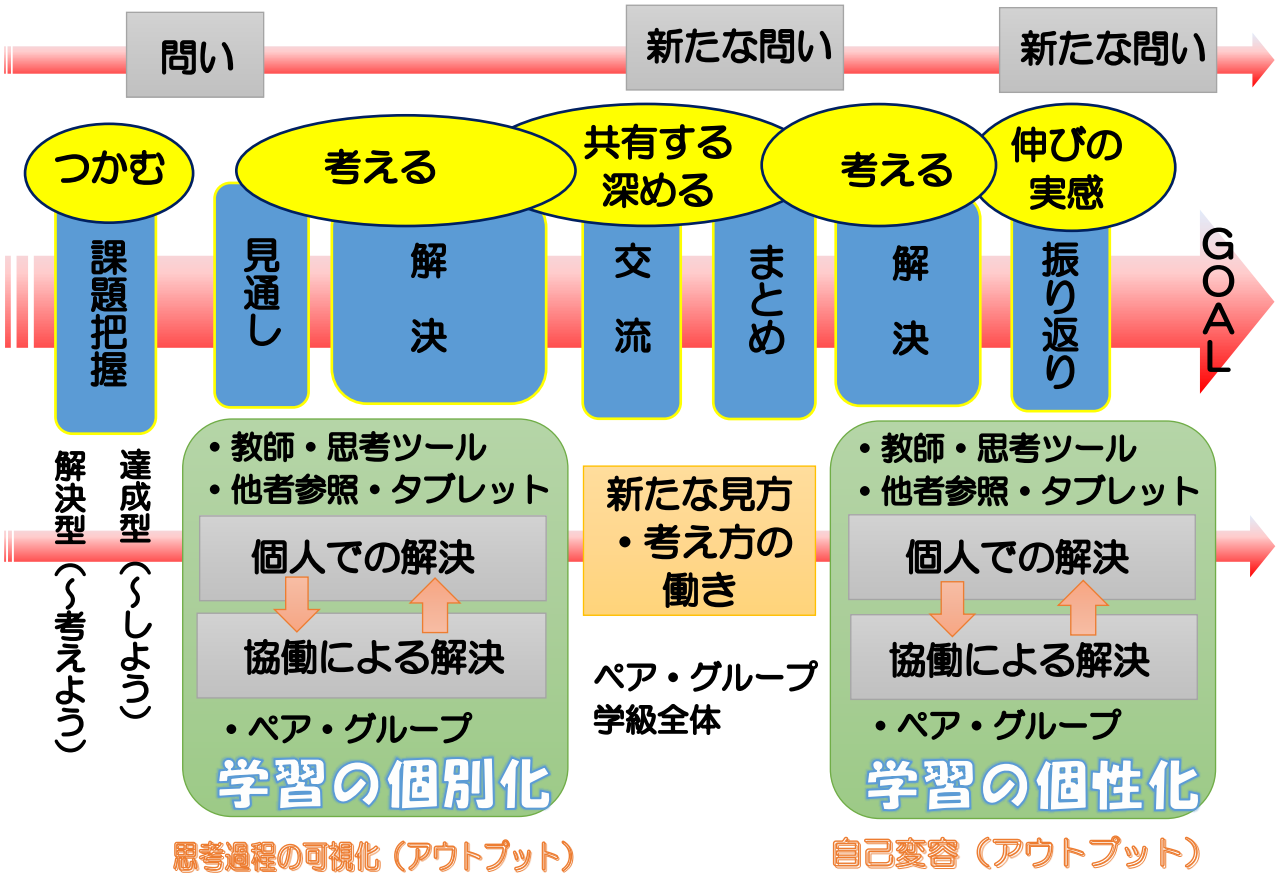
○課題を解決する
○解決の仕方を共有する
　※見方・考え方の共有
○新たな「問い」を解決する
　※数値・言葉を変えて
　※汎用性を確かめる
　※問題になる場面を考える

2　学習指導場面を活かした指導過程

（１）砂川学園学習スタンダード

砂川市では、令和４年度から、市内統一した『学び方』（授業スタンダード）を設定し、どの学校でも同様の学びが進められることにより、義務教育学校開校時の子どもたちの学習に対する戸惑いを軽減させるとともに、市内全ての子どもたちに、学習指導要領で示されている３つの資質・能力を確実に身に付けさせ、「目指す児童生徒像」の実現に向けた小中一貫教育の取組を進めてきた。

本研究では、そうした経緯とこれまでの取組の成果と課題を踏まえつつ、主題達成に向けて本校で目指す学習指導過程に基づく授業実践を推進し、その効果を検証する。



（２）実践上の留意点

実際に学習指導を行う際に、各段階で次のことについて留意する。

ア　課題把握

・達成型の課題設定を行う場合は、具体的に「何ができるようになるのか」を具体的に示す。
　例）　「～を読み取って図に表そう」、「～を考えて文章にまとめよう」

イ　見通し

・解決に向かうための「方法」「手立て」を明確にさせる。

ウ　解決

・「個人での思考」と「協働による解決」を柔軟に往還する学びを行ってもよい。
・「協働による解決」における話し合いは、あくまで学習の理解を深めるために行うものであることから、「何について話し合うのか」「どのように話し合うのか」といった視点をもたせる。

エ　交流・まとめ

・児童生徒に働かせるべき「見方・考え方」を明確化させる。
・「達成型」課題設定の場合は、まとめを省略して振り返りにかえることもある。
・「新たな問い」につなげるような発問の工夫を行う。

オ　解決

・取組を家庭学習につなげる工夫も考えられる。

カ　振り返り

・「振り返り」の視点を明確にさせる。

【振り返りの視点（例）】

習得	・学びの変容を振り返る	「〇〇が分かった。」「〇〇ができるようになった。」 【例】「登場人物の気持ちを読み取るには、その言葉や行動に着目すれば読み取れることが分かった。」
	・学びの過程や結果を振り返る	「〇〇することが分かった。」 「〇〇することができるようになった。」 【例】「いくつかの資料を比較して読むことで、江戸時代の農民と武士の生活の様子が分かった。」
	・交流を振り返る	「〇〇な考え方もあるんだ。」 「Ａさんはなぜ、こう考えたのだろう。」（「問い」） 【例】「最初はＡさんの考えに反対だったが、話し合いを通して、Ａさんの考えが少し理解できるようになった。しかし、自分は〇〇なので～」 「（サーブは）上から打つ方が絶対いいと思っていたけれど、作戦タイムを通して、いろいろな打ち方を試してみようと思った。」
活用探究	・活用問題に取り組む ・他の単元、教科で活用する ・次につなげる	「〇〇でもできるかやってみよう。」 「もっと〇〇について考えたい。」 「もし〇〇だったらどうかな。」（「問い」） 【例】「あさがおの育て方を勉強したので、今度は家でひまわりを育ててみたいと思いました。」 「お礼状の書き方を学んだので、職場体験でお世話になった職場の方にお礼状を書いてみたい。」

その他、各指導過程における具体的留意点は「指導の手引き」を参照する。

Ⅴ　検証の方法

本研究の成果の検証については、具体的な数値結果をもととし、教科の各単元における理解度及び知識・技能の習得、それらを活かして思考・判断・表現する力の定着度を図りながら、研究の検証・改善を進めることとする。

１　各種学力検査の分析・考察による学習内容の習得度及び育成を目指す資質・能力の検証

本研究の成果と課題を検証する材料として、「全国学力・学習状況調査」及び「標準学力検査」の数値を用いる。教科ごとの数値はもちろん、知識・技能、思考力・表現力・判断力について、それぞれ結果数値をもとに分析・考察し、研究の成果と課題を明らかにする。

また、これらの数値は単年ごとに分断されるものではなく、経年で変容をたどりながら、中・長期的な成果と課題も明らかにする。

２　指導系統表による各単元における理解度の検証

本研究の成果と課題を検証する材料として、「系統表」を用いる。

「系統表」には、年度ごとの標準学力検査の結果数値を反映させ、積み重ねられた指導の効果を検証するとともに、落ち込みが見られる単元については前学年の内容を柔軟に学び直すなど、誰一人取り残さない指導につなげる。

■「系統表」の意義

本校は、学習指導要領に基づき、９年間を一貫した教育課程を編成・実施しており、その実施にあたっては、本校の大きな特色といえる義務教育９年間を３区分化した「４・３・２制」それぞれの時期で重点化する指導内容（※）を明確にし、系統性を意識しながら指導を行うことが重要となる。

そのため、全ての教員が学びのつながりを認識し、前期課程から後期課程への接続過程において、子どもたちの不安や戸惑い、学び残しが生じないように工夫したり、指導の視点の連携を図ったりすることをねらい、教科ごとの「系統表」を作成し、１年生から９年生までの学習内容がどのようなつながりを有しているのかを全教員が理解し合うことができるようにする。

指導区分別重点内容（※）

○　１st ステージ（４年間：１年生～４年生）【基礎・基本の確実な定着】

繰り返し指導や補充指導等により、習熟を図ることを重視し、学習規律や基礎的・基本的な知識・技能の確実な定着を図ります。

○　２nd ステージ（３年間：５年生～７年生）【基礎・基本の活用】

これまでの学習や生活で身に付けたことを活用することを重視し、論理的思考力や活用力の育成を図ります。また、５年生から一部教科担任制の実施、後期課程に向けての交流事業等を行い、中学校の学習への円滑な移行を図り、中学校の学習に対する不安の軽減を図ります。

○　３rd ステージ（２年間：８年生～９年生）【個性・能力の伸長】

様々な場面での発展的学習等により、自分の生き方を考えさせたり、これまで身に付けたことを発展させたりすることを重視し、自ら課題を見つけ解決する力の育成を図ります。

３　児童生徒アンケート及び振り返り記述の検証

本研究の成果と課題を検証する材料として、「児童生徒アンケート」及び「振り返りの記述」を用いる。児童生徒の授業理解度を把握するとともに、学びを通して「自ら問いを持ち続け、主体的に新たな課題の解決に取り組む意欲や態度」が育成されているかを検証し、研究の成果と課題を明らかとする。

Ⅵ　研究内容

１　研究内容

「自ら問いを見いだし、解決策を模索して遂行する学習者」を育成する指導方法の在り方

２　具体的内容

（１）研究主題に迫るための、「砂川学園学習スタンダード」による学習指導過程の基本的展開と、各段階における指導方法の研究を行う。

（２）教育心理検査の結果をもとに、児童生徒の心理的安定状態や学校生活の意欲を中心に、児童生徒理解、生徒指導に関わる研究を行う。

（３）その他、今日的課題に関わる研修や、速やかに実践に活かすことができる技能に関わる研修、外部人材を招聘して行う研修等、バランスのとれた内容とする。

３　留意事項

（１）成果が子どもたちの成長に還元される研究を推進することを常に意識し、研究のための研修とならないようにする。

（２）初任段階教員研修の一環として位置づけ、学習指導や生徒指導などの基礎的指導技術の習得を中心に、初任段階教員の教師としての資質・能力を高める。また、メンター研修等との関連を図る。

Ⅶ　研究方法

１　研究推進の基本方針

（１）理論を基盤とした授業実践に裏打ちされた研究を推進する。

（２）児童生徒の実態をもとに、その変容を半期ごとに分析し、成果と課題を明らかにする検証改善サイクルによる研究を推進する。

（３）研究が個人レベルに分断されることがないよう、組織的な協働に基づく研究を推進する。

２　研究推進体制

（１）研　究　部　会：校内研究推進に関わる全般について企画・立案する。

（２）研究推進委員会：校内研究の内容や方法、外部講師の招聘や研修に関わる予算などについて、大枠の方針を検討する。

（３）全　体　研　修：全教職員で児童生徒の実態を把握したり、研究成果や課題を共有したりする。

（４）ステージ研修：３つのステージごとに指導案検討や研究成果と課題の協議などを行う。

（５）教科・領域研修：教科・領域ごとに指導案検討や研究成果と課題の協議などを行う。
※「道徳科」は「領域部会」とする。

（６）個　人　研　修：研修会に参加したり、書籍等を活用したりして、校内研究に基づく理論や実践を補完する研修を個人で推進する。

※（３）～（６）については、「研修履歴」に各自記録してもよい。

３　具体的方法

（１）研究の中心母体を「教科・領域部会」とし、コーディネート役は各ブロック所属の研究部員が当たる。

（２）「教科・領域部会」は次の構成とする。

ア　５教科部会：国語、算数・数学、社会、理科、外国語（英語）での研究・実践を行う。
イ　実技教科部会：保健体育、図工美術、技術家庭、音楽での研究・実践を行う。
ウ　領域部会：道徳、学級活動、総合的な学習の時間での研究・実践を行う。

（３）「ワークショップ型」の研修を基本とし、全員参画、時間の効率的活用に留意する。

（４）各ステージの「教科・領域部会」でそれぞれ３本の授業を公開し、ステージ所属教員はそれらの授業を参観し、授業後の検証を行う。

（５）各ステージの「教科・領域部会」で公開される３本の授業のうち、それぞれ１本ずつを「全員参観授業」とする。

（６）授業参観の視点を次の３点に明確化させる。

ア　視点１：自ら問いを見いだす活動
①課題の質
②見通しのもたせ方
③「新たな問い」につながる手立て
④振り返りの在り方

イ　視点２：解決策を模索する活動
①個人思考の進め方
②協働的な学びの進め方
③個人思考と協働的な学びの往還

ウ　視点３：遂行して解決する活動
①課題解決のさせ方
②見方・考え方の共有
③新たな「問い」の解決過程

（７）本研究は４か年研究とし、年次ごとの重点を次のとおりとする。

１年次（令和８年度）	
重点	研究体制の整備
取組	○理論研究 ○児童生徒の実態把握 ○部会内の連携 ○授業実践 ○課題の洗い出し

２年次（令和９年度）	
重点	研究の促進
取組	○児童生徒の実態把握 ○部会活動の充実 ○授業実践 ○成果・課題整理

３年次（令和 10 年度）	
重点	研究の発信
取組	○児童生徒の実態把握 ○公開研究会開催 ○授業実践 ○成果・課題の整理

最終年次（令和 11 年度）	
重点	研究のまとめと 新たなテーマ設定
取組	○児童生徒の実態把握 ○授業実践 ○研究の振り返り ○成果・課題の整理 ○新たなテーマ設定

4　研究推進計画

月	日	曜	形態	内容
4				

Ⅷ　全体構造図

○日本国憲法
○教育基本法
○北海道教育目標
○北海道教育推進計画
○空知管内教育推進の重点

学校教育目標

自分を磨き、よりよい未来を創造する子どもの育成

○砂川市教育目標
○砂川市教育推進計画
○砂川市教育実践方針
○児童生徒・地域の実態
○児童生徒・教職員・保護者・地域住民の願い

■目指す児童生徒像

【知】	**よりよく考え、主体性と協働性を高めながら学び続ける子**
【徳】	**思いやりにあふれ、豊かな人間性をもって人とともに生きる子**
【体】	**進んで運動に親しみ、安全で健康的な生活をつくる子**
【郷土】	**ふるさと砂川に誇りをもち、地域を支え未来を切り拓く子**

■育成を目指す資質・能力

【知】	**①粘り強さ　②協働力　③主体性**

■研究主題

自ら問いを見いだし、解決策を模索して遂行する学習者の育成

■研究内容

「自ら問いを見いだし、解決策を模索して遂行する学習者」を育成する指導方法の在り方

■研究の視点

研究の視点１《自ら問いを見いだす活動》	研究の視点２《解決策を模索する活動》	研究の視点３《遂行して解決する活動》
①課題の質 ②見通しのもたせ方 ③「新たな問い」につながる手立て ④振り返りの在り方	①個人思考の進め方 ②協働的な学びの進め方 ③個人思考と協働的な学びの往還	①課題解決のさせ方 ②見方・考え方の共有 ③新たな「問い」の解決過程

◎砂川学園「学習スタンダード」の徹底（指導過程、持ち物、学習のきまり）
◎ＩＣＴ機器（タブレット端末）の効果的活用
◎家庭学習の充実

各種学力検査の分析・考察による学習内容の習得度及び育成を目指す資質・能力の検証

指導系統表による各単元における理解度の検証

児童生徒アンケート及び振り返り記述の検証

Ⅸ　参考資料（保護者用「学習スタンダード」より）

1　学びの約束

（1）授業を受ける時の姿勢

背筋を伸ばして正しい姿勢を身に付けることには、「持続力」や「集中力」がつくなど、学習効率の向上につながる効果があります。

（2）学習のきまり

＜授業前＞
①次の時間の準備をします。～教科書、ノート、筆記用具　⇒（3）机上の整理
②忘れ物をしたときは、休み時間のうちに先生に報告します。
③チャイムが鳴り終わるまでに席に着きます。

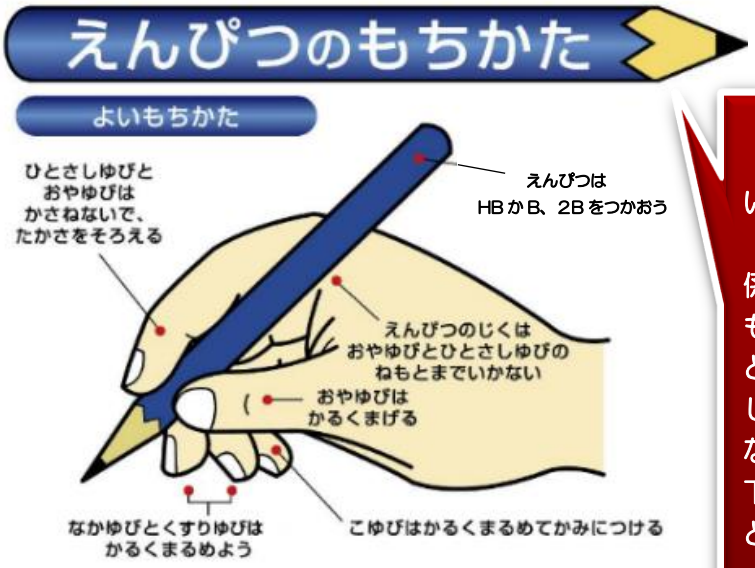
＜授業中＞★正しい姿勢で座ります。

【聞く】
①話す人を見ながら最後まで聞きます。
②自分の考えと比べながら聞きます。
③聞き終わったら返事をします。（同じです。いいです。他にあります。など）

【発表する】
①名前を呼ばれたら相手に聞こえるように返事をします。
②みんなに聞こえる声の大きさで語尾まではっきり話します。
③順序よく、整理して伝えます。

【書く】　※「課題」は青、「まとめ」は赤
①正しい鉛筆の持ち方で書きます。
②正しい姿勢で書きます。
③ていねいに字を書きます。

＜授業後＞★次の授業の準備をしてから、休み時間に入ります。



間違った持ち方が定着してしまうと、正しい持ち方に矯正するのは難しくなります。

「それなりに字が書けるなら、持ち方は関係ないのでは？」と思う方もいらっしゃるかもしれませんが、えんぴつを正しく持たないと、疲れやすかったり上手に書けなかったりしてしまい、その結果、長く学習を続けられない、姿勢が悪い、集中力や勉強への意欲低下につながるなど、学力低下の要因になることもあります。

（３）机上の整理

鉛筆	１年　　2B ２年　　2B または B ３年～　B または HB
色鉛筆 （青・赤）	１・２年は色鉛筆 ３年～　ボールペン可
消しゴム	四角いもの
15 ㎝定規	１年生から使います 折りたたみ式は不可です

学習に集中できるように余計な物は置かず、「鉛筆・消しゴム・色鉛筆（ボールペン　青と赤）・定規」を基本とし、柄はシンプルなものを推奨します。

２　学習用具

（１）筆入れに入れる物

- ■ 鉛筆５本程度
- ■ 色鉛筆（ボールペン）
- ■ 消しゴム
- ■ 定規（１５ｃｍ）
- ■ 油性ネームペン（２年生以上）

分度器や定規は、目盛りの読みやすさの観点から、イラストのない透明でシンプルなものを用意してください。

（２）学習用ノート

学校では、ていねいな文字で学習内容をまとめるノート指導を充実させ、学力の定着を図るため、それぞれの教科で使用するノートを下表のとおりそろえます。

教科	１年生	２年生	３年生	４・５・６年生
国語	８マス 十字リーダー入	１５マス 十字リーダー入	１８マス 十字リーダー入	５ミリ方眼 十字リーダー入
算数	７マス 十字リーダー入	１４マス 十字リーダー入	５ミリ方眼　十字リーダー入	
社会			５ミリ方眼　十字リーダー入	
理科			５ミリ方眼　十字リーダー入	
その他	【必要に応じて】連絡帳・自由帳		５ミリ方眼　十字リーダー入	

（３）学校に置いてよい物

学校では、子どもたちの道具の持ち運びに係る負担を軽減させるため、右の物を学校に置いてよいこととします。

〇教科書（書写・生活・図工・音楽・道徳・家庭・保健体育）　〇リコーダー

〇鍵盤ハーモニカ　〇習字セット　〇裁縫セット　〇お道具袋

〇絵の具セット　〇紅白帽子　〇とびなわ